

平成29年5月の現況と6月の対策（野菜）

現況（29年5月20日現在）

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

福井地区では、2月下旬定植の早いもので7段果房が開花盛期で、5月19日から収穫開始（平年並み）で、選果場が稼働している。南越地区では、3月下旬定植で5段果房が開花している。

若狭地区では、越冬栽培は18～20段、越夏栽培は1～2段収穫中となっている。灰色かび病、コナジラミ類が微発である。

(2) ミディトマト

若狭地区の促成長期どり栽培は、23～31段花房を収穫中である。5月に入ってから収穫量が増加している。

葉かび病、灰色かび病が少発である。

半促成栽培は、福井、坂井、南越、若狭地区の3月中・下旬定植のものは、4～8段果房が開花しており、早いところで5月下旬から出荷見込みである。奥越地区では、4月上旬から定植が始まり、6月まで順次定植される。

葉かび病が一部少発、うどんこ病が局微発である。

(3) キュウリ

3月中旬定植の福井地区では、継続収穫中である。

4月下旬定植の三州地区では、8～13節となっている。

うどんこ病が少発、アザミウマ類、アブラムシ類が微発である。

(4) ハウススイカ

坂井北部丘陵地では、定植が早いものでは4月25日頃から開花が始まり、果径は22～25cmとなっている。三里浜砂丘地では、開花は4月20日から始まり盛期は4月下旬である。

アブラムシ類が少発である。

(5) メロン

坂井北部丘陵地では、アールスメロンは5月初めと平年並み～やや遅めに開花が始まったが、着果・肥大は良好である。プリンスメロンは、開花交配が4月12日から行われ、早いところで5月19日から平年並みの出荷開始となっている。アンデスメロンは、開花交配が4月27日から行われ、一部では花粉の出が悪く着果不良となった圃場も見られた。

坂井北部丘陵地、三里浜砂丘地のマルセイユメロンは、開花交配が4月14日頃からは行われている。一部では着果数がやや少ないため、草勢が強めとなっている圃場があるものの、生育は概ね良好である。南越地区では、ネット発生期となっており6月上旬から出荷見込みである。

アブラムシ類が少発、つる枯れ病が局微発である。

(6) イチゴ

県内の高設イチゴは5月中～下旬ではほぼ終了している。

葉菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区では、4月中旬播種のハウレンソウを約30日で収穫中である。

(2) 葉ネギ

若狭地区の周年水耕栽培は、2月下旬播種分を収穫中である。播種から収穫までの日数は、約80～85日である。気温が上がってきており、草丈がやや長めになっている。

根菜類

(1) ダイコン

三里浜砂丘地では、収穫開始が平年並みの4月25日からとなった。

2 露地野菜

果菜類

(1) ピーマン

丹生地区では、4月27日に定植しトンネルが設置された。5月20日頃にトンネルを除去し、第1果房が着果している。

(2) スイカ

坂井北部丘陵地、三里浜砂丘地では、トンネル除去開始が5月15日から行われた。生育は平年並み～遅めとなっている。

越前市白山地区では、4月29日から定植された。

(3) カボチャ

坂井地区では、5月6日頃からトンネル除去を開始しており、生育は平年並みである。

(4) ナス

奥越地区では、4月20日から定植が始まった。草丈60cm程度、第2果房開花となっており、生育は平年並みである。

(5) 一寸ソラマメ

若狭地区では、平年より開花が早かったものの、初期の花は着果しなかったことから、収穫は平年並みの5月下旬見込みとなっている。坂井地区では肥大期で生育は平年並みである。

赤色斑点病が微発である。

(6) スイートコーン

福井地区では、永平寺町で4月20日から順次定植された。草丈40cm、葉数8.0枚で、昨年より草丈が短めになっている。旧清水町でも4月20日から順次定植されている。

アワノメイガが少発である。

(7) エダマメ

二州地区では、移植栽培は4月24日から定植され、直播栽培は5月1日から播種されている。

(8) キュウリ

丹生地区では、5月23日に苗が配布され、順次定植されている。

葉菜類

(1) ブロッコリー

3月中旬から4月中旬定植の福井、南越地区では、早いもので5月中旬から収穫している。

アオムシ、コナガ、ヨトウムシ類が微発である。

(2) ネギ

奥越地区の越冬どりは、5月1日からは青ネギ、白ネギ（軟白25cm規格）として出荷している。水稲作業との競合もあり、出荷はやや遅れ気味である。

3月下旬定植では、葉鞘径が福井、坂井地区で9.0～12.0mmである。4月上旬定植では、葉鞘径が福井、坂井、奥越、二州、若狭地区で6.0～8.8mmとなっている。

4月中旬定植では、葉鞘径が福井、若狭地区で3.3～7.0mmである。

さび病が微発、アザミウマ類が微～中発、ハモグリバエ類が微～少発である。

(3) キャベツ

坂井地区では、越冬初夏（5～6月）どりは水田地帯は5月8日から、収穫が始まっており、生育は平年より7～10日程度早い。越冬前の生育が進んで外葉が小さいうちに結球が始まったため、小玉傾向である。坂井北部丘陵地は、結球始め～中期になっている。また、春植え6月どりでは、4月6日から定植が行われており結球中となっている。

菌核病が少～微発、アザミウマ類、コナガが少発である。

根菜類

(1) ダイコン

三里浜砂丘地では、5月12日から出荷が始まり、虫害は平年よりも少なく、尻づまりもよく品質良好である。

(2) タマネギ

福井地区では、草丈82cm、生葉数7.6枚、球径7.1cmとなっている。抽苔は多い圃場で5～10%発生している。6月10日頃から収穫開始見込みである。

坂井地区では、草丈48～85cm、葉数6.7～8.5枚、球径4.0～5.0cmである。抽苔は1%未満と前年よりかなり少ない。

腐敗病が一部少発、葉先枯れ症が微発である。

(3) ラッキョウ

三里浜砂丘地では、生育量は平年より大きく、肥大は一年掘りで良好、三年子でやや緩慢となっている。一年掘りは5月18日から収穫が始まっている。なお、三年子は6月上旬から出荷予定となっている。

(4) カンショ

坂井地区では4月下旬から定植開始となっている。

(5) サトイモ

奥越地区では、5月15日頃から出芽が始まっており、早いもので葉数1.5枚程度で順次出芽している。

(6) ニンジン

坂井北部丘陵地では、本葉4～9枚で生育は平年並み～良好である。

三里浜砂丘地では、本葉4枚程度で生育は播種日によりばらつきが見られる。

(7) ニンニク

福井地区では、草丈86cm、生葉数9枚、球の肥大は平年よりやや遅めである。

さび病が少～中発、春腐病が少発である。

対 策

5月は、気温が高めに推移したため、生育は順調に経過している。ただし、例年より害虫の発生が早まっていることから早期発見、早期防除に努める。

これから梅雨時期に入ると曇天が続き、草勢も軟弱になりやすく病害も多発する。また、降雨が続き土壌水分が過多になることで、根群が衰弱し草勢の低下を招きやすくなる。さらに、急激な土壌水分の変化は、果菜類の食味低下や裂果を発生させる要因となり、品質・収量低下の原因となる。このことから、梅雨入り前には、再度排水対策を徹底するとともにハウス換気に留意する。また、草勢を見ながら整枝、摘葉、摘芯、追肥、防除等の適正な肥培管理を行う。

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

上段果房の肥大期となるので、土壌水分を確保し、込み合った部分の葉を摘除、剪葉する。換気を十分にしてハウス内の気温や湿度を下げ、養分消耗の抑制と葉かび病、灰色かび病等の発生防止に努める。また、土壌水分の急激な上昇は裂果の原因になるので、ハウス周囲の排水溝を整備して降雨等の浸透を防ぐ。

(2) ミディトマト

日照不足と夜間高温が続くと糖度の上昇が悪くなるので、ハウス換気とともに込み合っているところでは摘葉を行う。かん水を控えめにすることで糖度の上昇を促進させる。しかし、水田地帯のハウスでは、周辺水田からの入水や降雨による地下水位の上昇が糖度低下や裂果の原因となるので、ハウス周囲の排水溝等を整備し、ハウス内への入水を防ぐとともにハウス内土壌の乾燥に努める。さらに、病害虫の発生時期と重なるため、葉かび病、灰色かび病、コナジラミ類、アザミウマ類の防除を徹底して、健全葉を維持し、草勢や果実品質の低下を防ぐ。特に、アザミウマ類は金粉果の発生原因やトマト黄化えそウイルスを媒介するので注意する。なお、トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミにより永続的に伝搬されるので、防虫ネットの設置による侵入防止と発生初期の徹底防除を図る。

(3) キュウリ

草勢が急激に低下すると、曲がり果や尻細り果等が多くなるので、着果量を考慮しながら追肥やかん水により草勢維持を図る。また、親づるの摘葉、子づるや孫づるの整枝等を行って日当たりや通風を良くするとともに、ハウス換気を十分に行うことで生育の安定と灰色かび病やべと病等の発生防止に努める。なお、摘葉を行うときは、1回に多くの葉を摘除すると草勢を低下させるので、1回当たり2枚程度までとする。

(4) スイカ

玉の肥大促進のため、開花後25日間程度は土壌水分を確保するが、その後は糖度上昇を促進するためかん水は控えめにする。しかし、極端な草勢低下は食味を悪くするので、収穫期までに著しく草勢が低下しないよう草勢を見ながらかん水を行う。また、果実の肥大盛期を過ぎて再びつる先に着果を確認した場合、収穫する果実の肥大や品質を低下させるので必ず摘果する。さらに、収穫の約2週間前には玉直しをして果実底部の着色を促すとともに、病害虫防除を行って健全葉を確保する。

(5) ネットメロン

ネット完成期以降の養水分過剰は、2次肥大による稜角果や微細なネットが発生する原因となる。また、収穫前の土壌水分過剰は糖度不足や裂果の原因になるので、かん水は控え目にする。しかし、極端な土壌乾燥も石灰の吸収抑制や草勢低下による発酵果の原因となるので注意する。なお、草勢低下につながるつる枯病、菌核病等の防除は事前に対処しておく。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

ハウレンソウ等は高温によって急激に生育が進むため、収穫遅れにならないよう計画的な収穫に努める。なお、これから播種する場合は、高温や日照不足によって徒長しやすくなるので播種密度を下げるとともに、換気を十分に行い多かん水を避ける。高温の栽培となるため、収穫適期が短くなるので段播きを徹底する。

2 露地野菜

果菜類

(1) スイカ

梅雨入り前の6月上旬までに一斉着果させる。着果後は早めに追肥を行い、かん水量を増やして果実肥大を促す。梅雨入り以降に着果となる場合は、花が雨にあわないようにトンネル等で雨よけをしながら着果を促す。また、ソフトボール大になったら、果形の良いものを2つに1果を残し、後は摘果し着果標識を立てる。さらに、着果後は根群発達が悪くなり、急激な草勢低下や病害の発生が見られる。このため、着果節位よりつる先の側枝を放任して根群の維持を図るとともに、つる枯病等の病害防除を徹底する。

(2) ナス、ピーマン

収穫開始頃から追肥を始めるとともに、土壌水分を確保して、草勢の維持と果実品質の向上に努める。特に土壌水分の不足は、果実肥大を悪くするだけでなく、日焼け果や尻腐れ果の発生を助長するので、畝間（通路）が常に湿っている程度になるよう、必要に応じてかん水を行う。また、秋まで長期に栽培されるナスやピーマンは、根群の健全化が特に重要であり、肥料切れをしないよう追肥するとともに排水対策を徹底する。さらに、病害虫防除を徹底して健全葉の維持確保に努める。

(3) キュウリ

初期生育を確保するため主枝は7節目位から着果させ、収穫始め頃から追肥を行う。梅雨期に入るとべと病が発生しやすくなるので、込み合ったところの摘葉を行って風通しを良くするとともに予防散布を徹底する。なお、耕種的防除として、稲ワラなどによるマルチも雨による泥はねを防ぎ病害の発生を軽減させるため利用する。

(4) カボチャ

親づるでは12～15節、子づるでは8～10節に着果させるので、着果節位までの側枝や雌花は早めに除去する。また、開花期に訪花昆虫が少ない場合は午前9時頃までに人工交配を行う。1番果の着果が確認されたら次の果実は摘除する。果実が野球ボール大になった頃の草勢が弱くつる先が立っていない場合には、つる先付近に追肥を行う。

(5) イチゴ

親株は発生したランナーを20cm程度の間隔に配置する。土が乾燥するとランナーの発生が悪いので、必要に応じて適宜かん水を行う。ハダニ・アブラムシの防除を徹底する。薬剤抵抗性を回避するため同一系統の薬剤を連用しない。

葉菜類

(1) ネギ

草丈や葉鞘茎の伸びを確認しながら、天候を見計らって追肥、土寄せ作業を行う。梅雨入り前に、圃場周辺の排水対策を再確認するとともに、軟腐病、白絹病対策として粒剤を必ず散布する。

根菜類

(1) サトイモ

6月中旬頃から子いもが着生し始めるので、覆土が浅い場合は土寄せを行って、過剰な子いもの着生を抑えて肥大を促す。また、アブラムシやハダニの防除を行い、健全葉を確保する。

(2) カンショ

植付けが遅れると地温が上がりすぎて、いもの形成が悪くなるので、6月中旬までに定植を終える。また、定植は曇天や夕方に行い、株元に土を置いて葉がマルチに触れないようにする。

3 梅雨入り前および梅雨入り後の管理

(1) 草勢維持

- ア 하우스回りや圃場周囲の排水溝、圃場内の畝間を整備し、雨水が速やかに排水し、圃場内や畝間等に滞水しないようにする。
- イ 草勢、葉色、果実肥大速度等を見ながら追肥を行う。
- ウ 夜間が高温となる時は、換気を十分に行って呼吸による養分消費を抑制する。
- エ 整枝、摘葉等により採光を良くする。

(2) 病虫害防止

- ア ハウスの破損部分を早急に補修し、雨漏りによる作物への濡れを防ぐ。
- イ 暴風雨時は、ハウスを閉めて雨が吹き込まないようにする。
- ウ 整枝、摘葉等は晴天日に行い採光、通風を良くする。
- エ マルチや敷きワラをして雨による作物への土の跳ね上がりを防ぐ。
- オ マルチ上に水溜りができる場合には、穴を開けて排水する。
- カ 雨が続く場合には、雨の止み間をみて病虫害の予防散布を行うこと。